

各部隊は軍の方針に随つて築城施設に著手し軍司令官は自ら各集團の陣地を視察して直接築城の指導に任じ凡てが概ね計画通り順調なる進捗を見つつあつた。

三、連合艦隊司令部の遭難

昭和十九年五月五日午後三時左の大本營発表があり古賀大將は元帥府に列せられた。

一、連合艦隊司令長官古賀峯一大將は本年三月前線に於て飛行機に搭乗全般作戦指導中殉職せり

二、後任には豊田副武大將親補せられ既に連合艦隊の指揮を執りつつあり

三、横須賀鎮守府司令長官後任には吉田善五大將親補せられたり

右の報告は戦局重大の時機ではあり又約一年前にその前任者山本元帥が戦死したことであり、国民に異常なる不吉の感を与えた。しかしこの事故のあつたのはそれより約一箇月を遡る三月三十一日のことであつた。

二月十七日トラックに対して行われた米機動部隊の大空襲はオニの真珠湾といわれた程の大損害を日本海軍に与えた。その被害は沈没、巡洋艦二隻、駆逐艦四隻、輸送船二六隻、飛行機の喪失約一八〇機に達した。敵は更に余勢を驍つてサイパン近海に出現しマリアナ諸島一帯は非常なる危険にさらされた。この時の敵機動部隊は大型空母九隻を中心とするもので、米海軍の新造艦多数が戦列に加つてゐることが明かになつた。この敵の傍若無人の行動に反し日本海軍の航空兵力は

0400

戦力愈々低下して有効なる攻撃を加え得なかつた為に敵は三月三十日遂に内南洋の西端パラオの要港を開始し四月一日まで三日間連続の攻撃を行つた。当時パラオは内南洋に於ける唯一の安全泊地として連合艦隊旗艦武蔵を始め補助艦艇の主力が碇泊していたがその大部は避退に成功し輸送船十数隻が撃沈された。

連合艦隊司令長官古賀峯一大将は艦艇を避退せしめた後自らは幕僚と共にパラオの陸上に移つたが三十一日夕明四月一日には敵上陸の虞あるものと判断し、全局の作戦指導の為比島のダバオに移動することにした。艦隊司令部の首脳は同夜大型飛行艇二機に分乗し午後十時頃同地を出発した。一番艇には古賀長官以下、二番艇には根留繁参謀長以下が搭乗し、夜間飛行を続けてミンダナオ島附近迄進出したので

あつたが、天候不良の爲一番艇は行方不明となり二番艇は比島のセブ
島附近の海上に不時著し残留参謀長以下約十名の生存者が陸軍守備隊
に収容せられた。一番艇は其の後全く消息を断ち古賀長官以下は殉職
と認定せられたのであつた。

四 北東方面の戦備強化

昭和十八年八月初頭アリユーション所在の全陸海軍を撤退し北東防
衛の第一線は千島に転移した。八月十七日大本營は北方軍司令官の隷
下の千島方面部隊を増強改編して北千島に千島第一守備隊（歩兵九箇大隊基
幹）中千島に同第一守備隊（歩兵一箇大隊基幹）南千島に同第一守備
隊（歩兵一箇大隊基幹）を配置し九月下旬之を完了した。米空軍は八
月中旬既にアッツ基地を撤成したものの如く占守島幌筵に対する空襲